

世界的なチェリスト、ミッシェ・マイスキー氏と、国立音楽大学とのスペシャルプログラムが始まります。
 第1回目は、マイスキー氏とのトークや本学教員とのアンサンブルをお届けするほか、
 今後は、マスタークラスなどのエデュケーションプログラムを予定しています。
 トップアーティストと本学の学びがクロスする「ミッシェ・マイスキープログラム in くにおん」、どうぞご期待ください。



ミッシェ・マイスキー (チェロ)

1948年ラトヴィア共和国リーガ生まれ。ロシアで学び、のちにイスラエルに移住。ロストロポーヴィチとピアティゴルスキー両巨匠に師事した、世界でただ一人のチェリスト。以後、ロンドン、パリ、ベルリン、ウィーン、ニューヨーク、東京をはじめ世界の主要コンサートホールで演奏活動を展開、熱狂的な支持を受け続けている。これまでにバーンスタイン、デュトワ、ジュリーニ、マゼール、メータ、ムーティ、バレンボイム、チョンといった名指揮者たち、さらにアルゲリッチ、ケーシシ、ランラン、P.ゼルキン、クレメール、バシュメット、レービン、ヴェンゲーロフ、ラクリンほか世界のトップアーティストらと共演している。マイスキーは、自らを「世界人」と位置づける。「イタリア製のチェロにオーストリアとドイツ製の弦を張り、フランスとドイツの弓で弾いています。6人の子供たちは4つの異なる国で生まれています。日本とアメリカの車を運転し、スイスの時計をはめて、インドのネックレスをしています。そして人々がクラシック音楽を評価し楽しんでくれるところではどこでも、そこで家にいるようにくつろぐことができます。」マイスキーの幼少時代や亡命に至った経緯やその苦勞と苦悩などは伊熊よし子さんの著書、「ミッシェ・マイスキー わが真実」に詳細に描かれている。30年以上におよびドイツ・グラモフォンの専属アーティストとして、40タイトル以上のアルバムを録音し世界各地で高い評価を獲得。日本のレコードアカデミー賞を5回、エコードイツ・シャルブラッテン賞を3回、パリのディスク・グランプリ賞など受賞、グラミー賞にもノミネートされている。2021年には、ドイツ・グラモフォンから44枚のCD録音全集を発売している。真の国際的アーティストであり数多くの受賞歴を誇る。近年だけでも、2018年イスタンブール国際音楽祭ライフタイム・アチーブメント賞、2019年ロンドン王立音楽アカデミーの名誉会員、2021年ローマ・サンタ・チェチリア音楽アカデミーの名誉会員に選ばれている。使用楽器は、1973年にニューヨークのカーネギーホールにデビューした後に篤志家から贈られた1720年製のモンタニャーナ。1986年に初来日。来日回数は優に50回を超えており、創設期から別府アルゲリッチ音楽祭のアドバイザー・コミティのひとりであり、数々のスタイルによるコンサートを通じて日本国内でもっとも親近感のあるアーティストである。



漆原 啓子 (ヴァイオリン)

1981年東京藝大付属高在学中に、第8回ヴィンヤフスキ国際コンクールに於いて最年少18歳、日本人初の優勝と6つの副賞を受賞した。その翌年、本格的に演奏活動を開始。1986年、ハレー・ストリング・クアルテットとして民音コンクール室内楽部門で優勝並びに斎藤秀雄賞を受賞。日本国内の主要オーケストラとの共演のほか、リサイタル、室内楽で高い評価を得ている。国内外の音楽祭にも多数出演。2011年デビュー30周年を記念しリリースした、自身初となる「J.S. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ&パルティータ」（日本アコースティックレコーズ）は、レコード芸術特選盤に選ばれる。2014年に漆原朝子と録音した姉妹デュオCD「無伴奏ヴァイオリン・デュオ」は平成26年度文化庁芸術祭レコード部門優秀賞を受賞。2017年にヤコブ・ロイシュナーと「モーツァルト：ヴァイオリンとピアノのための作品全集」をリリースし、レコード芸術特選盤に選ばれる。また、平成29年度文化庁芸術祭レコード部門優秀賞を受賞。同年9月15日に浜離宮朝日ホールで行われた同CDリリース記念リサイタルは、各方面から好評を博した。常に第一線で活躍を続け、安定した高水準の演奏は音楽ファンのみならず、指揮者、オーケストラ・メンバー等の音楽家の間でも非常に高い信頼を得ている。国立音楽大学教授、桐朋学園大学特任教授。



青木 高志 (ヴァイオリン)

桐朋学園大学卒業。ヴァイオリンを江藤俊哉、江藤アンジェラ両氏に師事。室内楽を原田幸一郎、堀了介、末吉保雄の各氏に師事。第57回日本音楽コンクール入選。第60回読売新人演奏会に出演。1990年より東京フィルハーモニー交響楽団コンサートマスターとして、また紀尾井シンフォニエッタ（現紀尾井ホール室内管弦楽団）のメンバーとしても活躍した。1998年より1年間、アフィニス文化財団海外研修員としてウィーンに留学し、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団コンサートマスター、ライナー・ホーネック、ウィーン市立音楽院において同コンサートマスター、ウェルナー・ヒンク両氏に師事。帰国後、JTアートホールアフィニスにてリサイタルを開催。室内楽奏者としても活躍し、1992年～2001年まで『モルゴア・クアルテット』のメンバーとして、ショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲全15曲を演奏、東芝EMIより4枚のCDをリリース。また、デズニーレコードより「デズニー・オン・クラシック ラブ&バラード・アコースティック・セレクション」をリリースするなど、各方面で活発な活動を行っている。1998年、第10回村松賞受賞。2015年、25年間在籍した東京フィルを退団し、国立音楽大学教授として後進の指導に力を注ぐと共に、The Orchestra Japan コンサートマスターとして「デズニー・オン・クラシック」を中心とした活動を行っている。2022年2月、ナミレコードよりCDアルバム「Poésie～詩(うた)を奏でる」を、ピアノの弘中美枝子氏とリリース。音楽之友社「レコード芸術」にて準特選盤に選出された。以降数々のコンサートを開催している。2025年の「デズニー・オン・クラシック まほうの夜の音楽会」では、急病のリチャード・カーシー氏に代わり35公演を指揮、ツアーを成功に導いた。使用楽器は国立音楽大学所蔵の、1719年製ストラディヴァリウス「レイザック」。



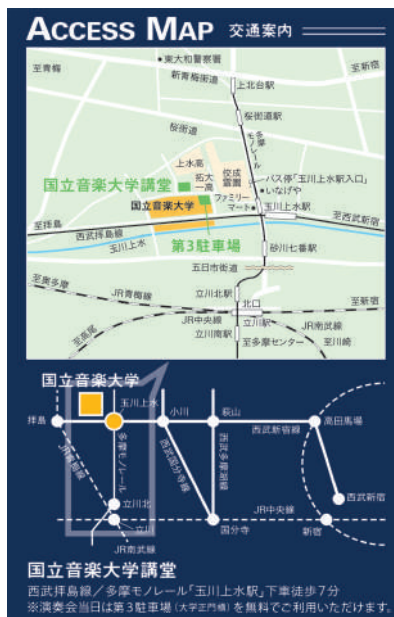
内藤 賢吾 (ヴィオラ)

国立音楽大学附属小・中・高等学校を経て、国立音楽大学ヴィオラ専攻卒業。ヴァイオリンを橋本千稲、奥田雅代、徳永二男の各氏に、ヴィオラを故川崎和憲、松井直之の各氏に、室内楽を漆原啓子、風岡優の各氏に師事。アジアユースオーケストラ2013に参加。北九州国際音楽祭ではオーケストラに複数回出演するほか、アウトリーチ事業において室内楽公演も行う。現在は、様々なオーケストラへの賛助出演、室内楽の自主公演などに精力的に取り組み、全国各地で毎年100回を超える公演に出演する傍ら、個人レッスン、室内楽および合奏指導など、講師としての活動も多岐にわたる。足利カンマーオーケスター、ヴィオラ奏者。国立音楽大学及び国立音楽大学附属高等学校非常勤講師。



梅本 実 (ピアノ)

東京藝術大学附属音楽高等学校、東京藝術大学を経て、同大学院修士課程器楽専攻（ピアノ）修了。ドイツ・デトモルト音楽大学卒業。さらに引き続きハンブルクにて研鑽を積む。帰国後東京、札幌、福岡各地でソロリサイタル開催。札幌交響楽団、九州交響楽団と共演。またドイツ歌曲の共演ピアニストとして各地で幅広い活動を続けている。勝谷壽子、伊達純、R.F.クレッチマー、C.ハンゼンの各氏に師事。文部省在外研修員としてドイツ・カールスルーエ音楽大学において白井光子・H.ヘルのドイツ・リート解釈法クラスで学ぶ。札幌市民芸術祭大賞（1999年、2002年）、第9回道銀芸術文化奨励賞（2000年）、第29回札幌文化奨励賞（2001年）、平成14年度文化庁芸術祭優秀賞（2003年）受賞。北海道教育大学助教授等を経て、現在、国立音楽大学及び大学院特任教授、学長。



【創立100周年記念募金受付中】

一定額以上ご寄付いただいた方は演奏会にご招待します。音楽文化人育成と音楽芸術振興を通じた社会への貢献に向けて皆様のご支援をお願いします。
 国立音楽大学経理課（寄付金係） TEL042-535-9528 kifukin@kunitachi.ac.jp

